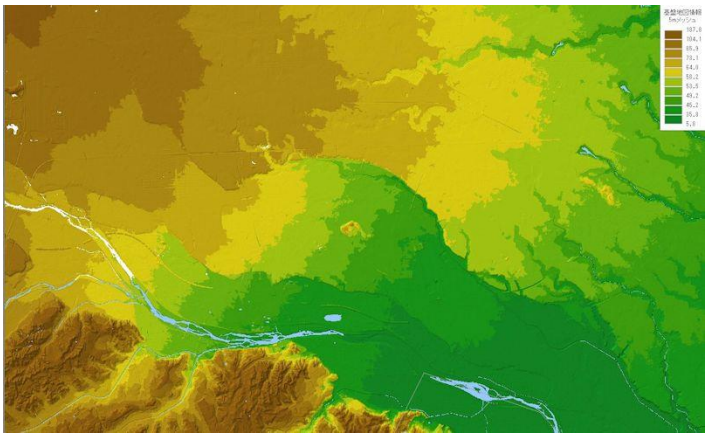
24-1　とうきょう湧水めぐり１　『武蔵野夫人』(大岡昇平)のお鷹の道へ（距離約 12km）

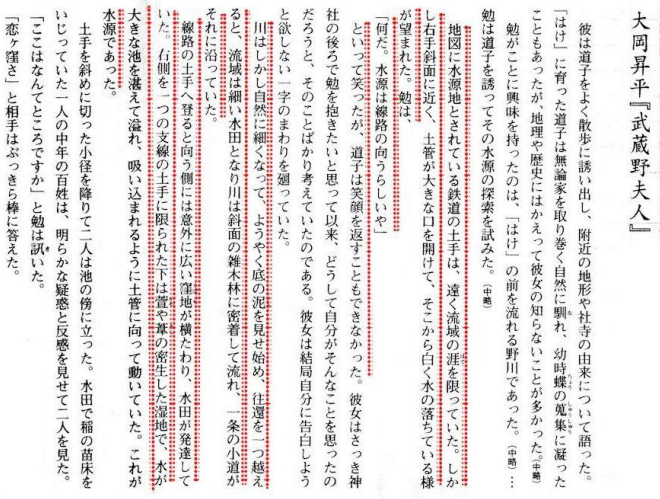


デジタル標高データに見る国分寺崖線全体
（中央東西に曲線を描くのが国分寺崖線）

【街歩きの概要】

関東地方では段丘の端っこをハケと呼ぶ。

そして、古い多摩川が刻んだハケの連なりは国分寺崖線と呼ばれて成城まで延々と続いている。『武蔵野夫人』にある地形学の教科書のような冒頭の文章を読みながらハケの下に延びる「お鷹の道」をたどることにする。その武蔵野の小道をたどれば、鎌倉時代の遊女達が朝な夕なに自らの姿を映して見ていたという「姿身の池」、そして絶世の美女といわれた玉造小町が病気に苦しんだとき、「池で身を清め（よ）」たところ病が治ったという「真姿の池」などの水面が、歩きの者を迎えてくれる。



大岡昇平『武蔵野夫人』

彼は道子をよく散歩に誘い出し、附近の地形や社寺の由来について語った。「はけ」に育った道子は無論家を取り巻く自然に馴れ、幼時蝶の蒐集に凝ったこともあったが、地理や歴史にはかえって彼女の知らないことが多かった。〔中略〕

勉がことに興味を持ったのは、「はけ」の前を流れる野川であった。〔中略〕…勉は道子を誘ってその水源の探索を試みた。〔中略〕

地図に水源地とされている鉄道の土手は、遠く流域の涯を限っていた。しかし右手斜面に近く、土管が大きな口を開けて、そこから白く水の落ちている様が望まれた。勉は、

「何だ。水源は線路の向うらしいや」

といって笑ったが、道子は笑顔を返すこともできなかった。彼女はさっき神社の後ろで勉を抱きたいと思って以来、どうして自分がそんなことを思ったのだろうと、そのことばかり考えていたのである。彼女は結局自分に告白しようと欲しない一字のまわりを廻っていた。

川はしかし自然に細くなって、ようやく底の泥を見せ始め、往還を一つ越えると、流域は細い水田となり川は斜面の雑木林に密着して流れ、一条の小道がそれに沿っていた。

線路の土手へ登ると向う側には意外に広い窪地が横たわり、水田が発達していた。右側を一つの支線の土手に限られた下は菖蒲や草の密生した湿地で、水が大きな池を湛えて溢れ、吸い込まれるように土管に向って動いていた。これが水源であった。

土手を斜めに切った小径を降りて二人は池の傍に立った。水田で稲の苗床をいじっていた一人の中年の百姓は、明らかな疑惑と反感を見せて二人を見た。

「ここはなんてところですか」と勉は訊いた。

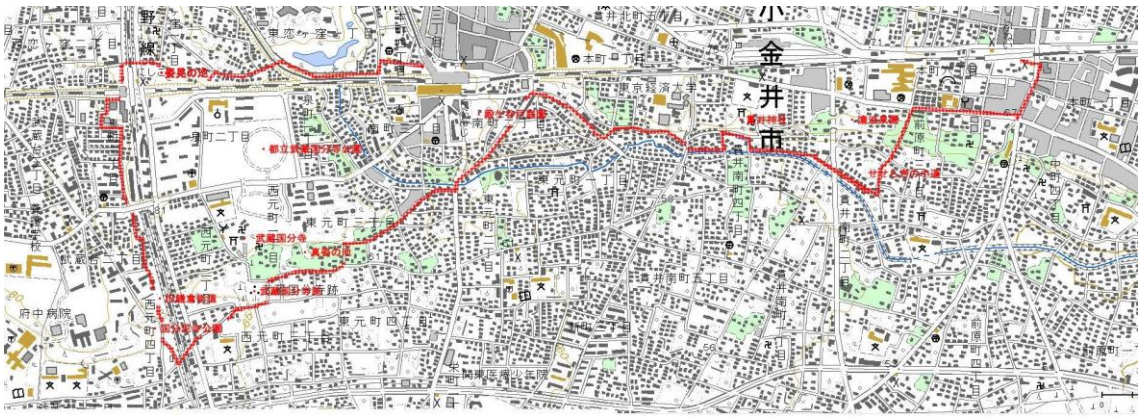
「恋ヶ窪さ」と相手はぶっきら棒に答えた。

野川の源流についての記述がある『武蔵野夫人』(部分)

【道順】

国分寺駅→日立中央研究所からJR線の南への流れを見る→日立中央研究所の塀越しに泉(見えない)→姿見の池→恋が窪用水からの流れ→雑木林→鎌倉街道跡→国分尼寺跡→国分寺跡→国分寺→お鷹の道→真姿の池湧水群→農家屋門→不動橋→殿ケ谷戸庭園(湧水)→新次郎池(湧水)→再び野川へ→湧水の道→貫井神社の（湧水）→滄浪泉園→JR 武蔵小金井駅

ルートマップ



国分寺から小金井（1/25,000 地形図「立川」）

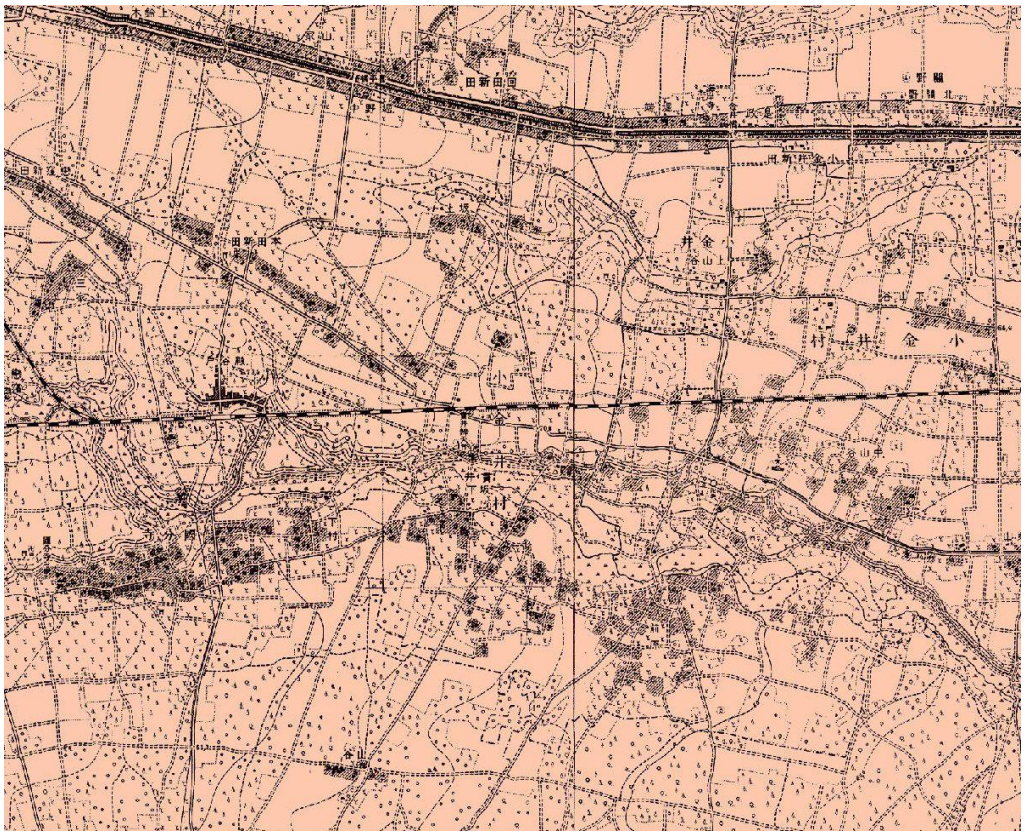
【街歩き解説】

①JR 国分寺駅

関東地方では段丘の端っこをハケと呼ぶ。古い多摩川が刻んだこのあたりの段丘は、国分寺崖線と呼ばれ、国分寺から小金井、深大寺、仙川、成城へと続いている。

JR 国分寺駅を起点にして、古多摩川が作りだした国分寺崖線のハケにつらなる道をたどりながら、湧水めぐりをスタートするのだが、その前に地図を広げて国分寺から小金井辺りの変遷を知る。そして、『武蔵野夫人』にあった、線路の向こうに源流があるはずの野川の風景を眺めてから湧水めぐりをスタートする。

中央線線路の向こうに野川の源がある

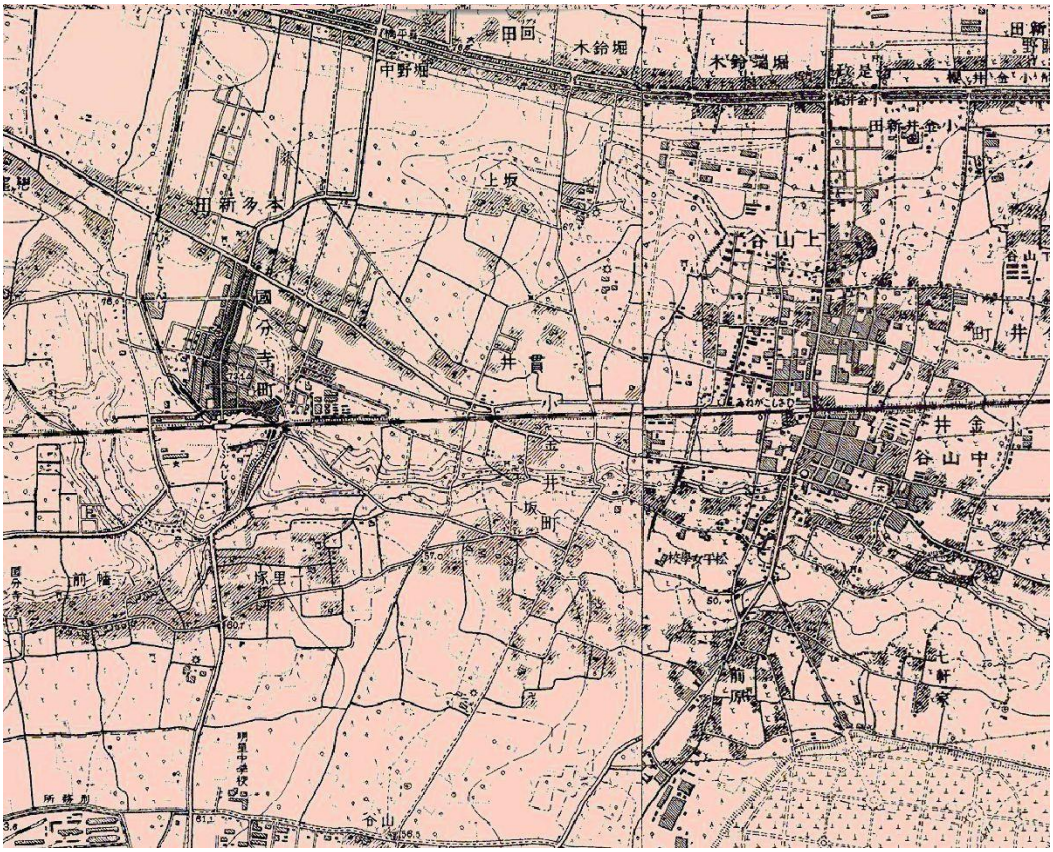


国分寺から小金井（1/20,000 地形図「田無」M39）

明治 22 年に開業した甲武鉄道会社線（現 JR 中央線）が東西に走っているものの、辺りの集落は古い街道に沿って発達している。耕作地には畑（白抜き）のほか桑畑が卓越し、野川沿いには田の記号がいくらか見えるが、武蔵野の雑木林が広がっているようすがうかがえる。

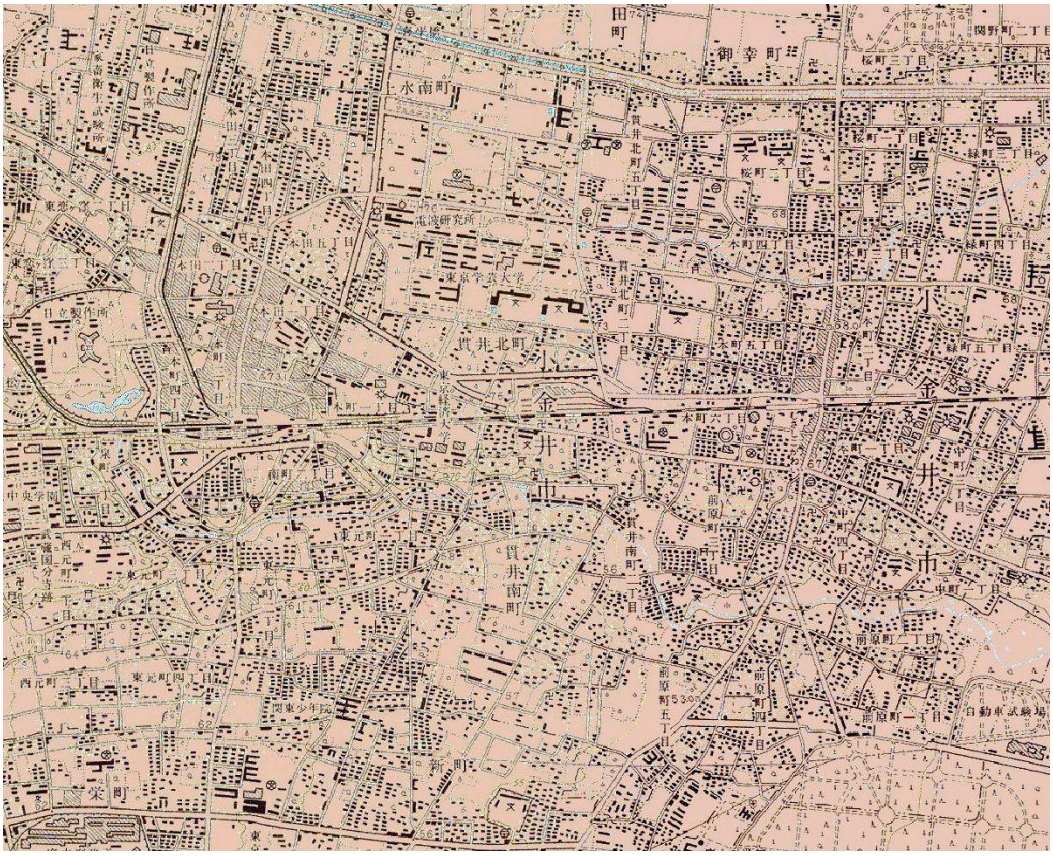
国分寺から小金井（1/25,000 地形図「立川」T10）

植生などに大きな変化は見られないが、砂利を運搬する東京砂利鉄道の下河原貨物線や多摩鉄道（現西武鉄道多摩川線）が開通し（いずれも 1910 年（M43）、都心へと向かう送電線が伸び、国分寺駅停車場に向けて街が発展するようすが見える。また、多磨墓地の整備も始まったようである。



国分寺から小金井（1/25,000 地形図「立川」S20）

桑畑はすっかり衰退し、国分寺や小金井といった鉄道駅を中心とした市街地や住宅地が発達を始め、関連して旧来の街道を補完する形の道路網も整備されつつある。もちろんのこと、その分だけ雑木林は少なくなる。また、多磨墓地は現在のようすに近い形に整備されている。



国分寺から小金井（1/25,000 地形図「立川」S41）

鉄道駅との関連で市街地が発達したのち、それを埋めるように住宅地はどこまでも広がり、関連して道路は網の目のように整備されている。反して、耕地は大きく減少し、桑畑はもちろんのこと野川周辺にあった田も見られない。地図からも現地でも、かつての武蔵野の面影を探しだすのは難しい。

②日立中央研究所から

あたかもハケの下部に蛇口を置いたように流れ出す湧水の多くは、小さな流れを集めて野川に注いでいる。野川は、現在の多摩川が、南に進路を変えた結果できた名残の河川でもある。

その、野川源流の一つが日立中央研究所内の泉である。

同研究所は、桜の春と紅葉の秋の年 2 回だけ解放されて、豊かな水を見せるが、通常は、JR 中央線北側の道路から塀の中の森を眺めて、あるいは塀の中の泉から JR 線南へ水流から想像するしかない。塀の外を流れる川は、コンクリートで固められている。

少しでも、その雰囲気を感じるために、日立中央研究所のやや西ある、同研究所からとは別の流れをたずねる。

住宅街と JR 線との間には、かつての恋ヶ窪用水に連なる小さな流れ（復元したもの）があって、鎌倉時代、「遊女達が朝な夕なに自らの姿を映して見ていた」という伝承に彩られた「姿見の池」に注いでいる。

線路の向こうの森が泉のある日立中央研究所・姿見の池

③鎌倉街道から国分寺跡へ

西国分寺駅を回るようにして、JR 中央線の南に進む。

途中の武蔵台 2 丁目 29 番地にある小公園には、「4,000 年前（縄文時代）もここがムラだった」とある。そして、鎌倉街道跡だという小さな雑木林の小道へと進む。

鎌倉街道と国分尼寺跡

残された鎌倉街道跡は、わずか 120m ほどだが、鎌倉から町田、府中を経て上野（こうづけ）、信濃へ続いていたという道筋は、適度な広がりがあり、切り通しもあって当時の雰囲気が伝わる。

その後、礎石などが残る国分尼寺・国分寺跡を経て、現在の国分寺へと向かう。国分尼寺の西側にある黒鐘公園にも雑木林のハケがせまっていて、湧水と小さな池がある。

現国分寺・お鷹の道

④お鷹の道・真姿の池湧水群

つぎに、散策道としてよく知られている「お鷹の道」を行く。

２万５千分の一地形図を広げると、樹木に囲まれた居住地の記号が、国分寺跡の東へとのびているあたりが、「お鷹の道」だ。さらに、この周辺には、樹林の記号もあってハケの森が続いているのだが、同図では森林部を緑色表現しないから、やや分かりにくい。

その点、１万分の一地形図では、ハケの森の存在は分かりやすい。

さて、お鷹の道は、この辺りが尾張徳川家の鷹場であったことから名づけられたといい、散策道とともに流れる小川は、小魚やホタルが生息しているほどの清水である。小道が、住宅地の中を通過する部分では、「静かに！」の注意書きもあるほど狭く、周辺には野菜を売る農家や古い屋門のある風景もあって、小川とともに進む快適な散策道だ。

その中ほどには、嘉祥元年（848 年）、絶世の美女といわれた玉造小町が病気に苦しみ、病の平癒を願い全国行脚をした際に、武蔵国分寺で願をかけたところ、まくらもとに現れた童子から「池で身を清めよ」との霊示を受けて、ここで沐浴すると病が治った」といういわれのある「真姿の池」が、一段と深いハケの森を背負って位置している。

朱の橋とお堂がある池の周辺には、たくさんの湧水があり、夏でも涼しい風が吹くと予想される。こうした池も、２万５千分の一地形図では小規模であるため表現されない。

お鷹の道で・真姿の池

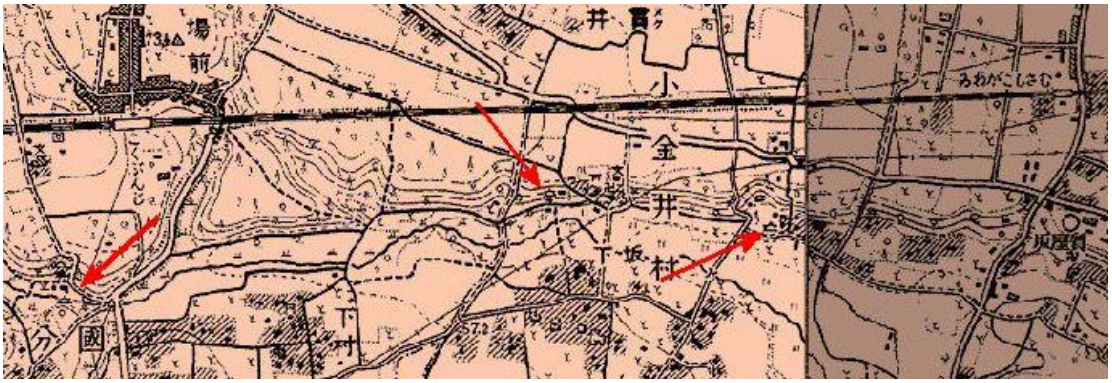
⑤殿が谷戸庭園・新次郎池

お鷹の道を過ぎて、日立中央研究所から始まる野川に架かる不動橋を経て、ハケの坂を上り JR 国分寺駅へもどる。

駅近くには、旧岩崎別邸であった殿ケ谷戸庭園を訪れる。

殿ケ谷戸庭園は、ハケ近くに造園された甘泉園（早稲田）、旧細川邸であった新江戸川公園（目白）、そして山形有朋の椿山荘（目白）、そしてこれから訪れる滄浪泉園（小金井）と同様に、傾斜と泉をたくみに利用した変化あふれる庭で、どの風景を切りだしても美しい。もちろん、庭園内のハケ下には、湧水と池があって、小さな流れは野川へと注いでいる。

さらに東へ進んだ、東京経済大学の東南隅にも、北澤新次郎学長の名前にちなんだという、清水が注ぐ新次郎池があるが、背後の森が少ないためか、湧水量は少ない。



水車の跡（「国分寺」（T10））

殿が谷戸庭園・新次郎池

⑥貫井神社の湧水

ときおり湧水を集めた野川の流れを見ながら、数本の等高線が重なる辺りを目標に、東へ東へと進む。野川縁にある「湧水の道」と名づけられた小さな道を通り終えると、天正十八年（1590）創建だという貫井神社に着く。

古い地図を見ると不動橋、貫井神社、そして滄浪泉園のあたりにも水車の記号が見えるが、いまはその面影もない。それでも、神社の裏手には、かつての姿を表現するようなハ

ケが迫っていて、そこから流れ出た湧水はかなりの水量があり、社殿前のひょうたん池に注いでいる。

貫井神社の西隣の愛宕神社の高まりからは、天候さえよければ、富士山が見えるのだという。

殿が谷戸庭園・貫井神社

⑦滄浪泉園へ

貫井神社の次は、やはりハケの庭、滄浪泉園（そうろうせんえん）へ向かう。

同庭園は、大正初期に土地の名士であった波多野承五郎が別荘地として造ったもので、昭和 52 年に東京都が買収したという。難解な園の命名は親交のあった犬養毅首相が名づけたとされ、庭園入口の門柱も彼の筆による。

この庭園も、緑と湧水の溢れる国分寺崖線の自然を上手く活かした造りとなっており、思った以上に起伏に富んでいる。やはり、1万分の 1 地形図なら、その辺りのようすが読み取れるだろう。

森閑とした園内には、赤松や杉、ケヤキ、モミジが鬱蒼と茂り、コゲラ、アオゲラ、ウグイスなどの野鳥が飛び交う。池をめぐる道すじには貴重な野草、江戸時代の寛文六年（1666）に作られた鼻欠け地蔵尊、江戸時代の正徳三年（1713）に作られたおだんご地蔵、水琴窟などの造形物が配置されている。

清らかな湧水は、園内奥のハケの下あって、小川となって、野川へと向かっている。

滄浪泉園と湧水・質屋坂

⑧「せせらぎの小径」から小金井神社へ

滄浪泉園の南で、野川に沿って東へ向かうと、住宅街の間に、ほんの小さな流れを持つ「せせらぎの小径」が短くある。この間、野川の南へ寄り道をすれば、「寛政六年庚申塔」と「閻魔堂」近くにある初冬には赤い実をたくさんつけるというイイギリの大木がある。

再び野川の北へ戻ると、ハケを上下する念仏坂、弁車坂、平代坂、質屋坂、妙貫坂など、いわれが楽しそうな坂道がたくさんあるほか、屋敷跡などを整備した小さな森は、ハケの森などと名づけられて憩いの場になっている。

近くには、山岡鉄舟の筆で法名が刻まれた侠客小金井小次郎の墓や十一面観音像のある金蔵院があって、ここの湧水が集まってできた黄金井という池が「小金井」という地名の起源になったとも言われている。そして、菅原道真公を祀る小金井神社などがあるから、適当に足を延ばすなどして JR 武蔵小金井駅へ向かう。

地図豆知識：国分寺崖線

東京都の西部に位置する国分寺周辺にみられる崖を「国分寺崖線（ハケ）」と呼び、これは（河岸）段丘崖である。国分寺崖線ほどの段差は見られないが、南に位置する調布市街地の先にも、もう一つの河岸段丘崖がある。したがって、多摩川沖積面から北へ、段丘崖、立川段丘、段丘崖、武蔵野段丘と階段状になっている。

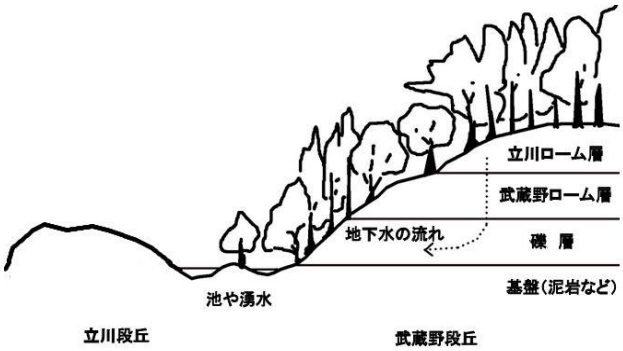
そして、関東平野では礫や粘土層からなる基盤となる地層の上に、関東ローム層と呼ばれる富士山や箱根火山の火山灰が堆積している。段丘面に降った雨水は、ローム層を浸透して基盤上の礫層や粘土層に到達し、貯留する。したがって、ショートケーキの切り口のように粘土層などがむき出しになった浸食崖のちょっとした谷間では、ローム層を通過した雨水が、湧き水や泉となって地上に現れる。

一方で、こうした浸食崖の地形は日本各地どこにもあって、豪雨による崖崩れなどの災害被害を受けやすい場所でもある。したがって、従来周辺住民は地域を災害から守るために、崖地の開発を出来るだけ遅らせてきた。

崖の上下には住宅地が広がっても、その狭間になった傾斜地には鬱蒼とした常緑広葉樹林が残されてきたのである。

ところが、東京のような大都会では、こうした地域にも開発の手が入っている。それでも 1/10,000 地形図などをよく見ると、込みあった等高線の連なりの中に、森林地を示す緑色の塊を随所に発見できるはずだ。

かつて文学作品にも登場した武蔵野のハケの道を歩きながら、崖地の自然は現在どのようになっているだろうか、湧水はどのていど残っているだろうか、河川浸食によって作られた崖がどれほどのものか、併せて都市近郊に自然がどれほど残っているかを確認してみる。



武蔵野段丘と湧水

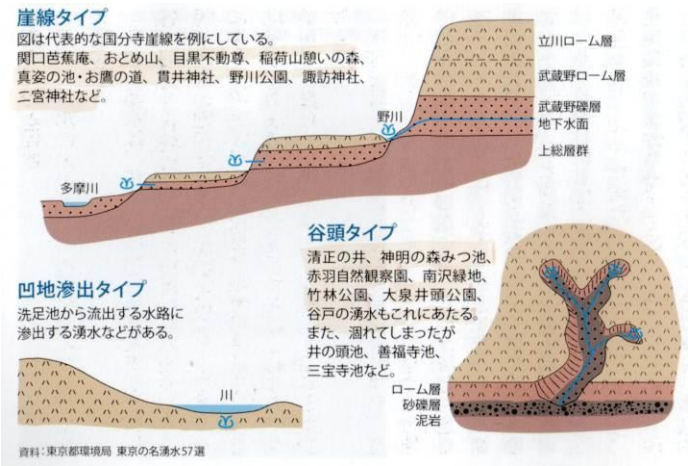
地図豆知識：湧水の種類

湧水は以下のようなタイプに分類される。それぞれの湧水がどのタイプのものか観察してみるといい。

崖線タイプ：川によって浸食された台地の段丘崖や断層面に露出した砂礫層から湧くもの。砂礫層の下部は水を透しにくい粘土層や泥岩になっていることが多い。湧水を供給するかん養域はごく狭い範囲である。

谷頭タイプ：台地面上の馬蹄型や凹地形などをした谷頭（台地面の谷の奥）の地形的に水を含む層が露出したところから湧くもの。地下水が湧水する力で谷頭地形が形成されることが多く、かん養域はごく広い範囲である。

凹地滲みだしタイプ：川床や凹地に地下水や伏流水が圧力で滲みだしてできる湧水。かん養域は地下水や伏流水に関連した広い範囲である。



湧水の分類（東京都環境局「東京の名水 57 泉」から）

地図豆知識：関東平野の変遷と河岸段丘

地質年代の関東平野の変遷を大急ぎでたどってみると、約 12～13 万年前の海進最盛期、関東平野は全面的に海であったが、（下末吉海進）、その後、海面は周期的に上昇と低下を繰り返し、この時期に関東平野の基盤となる武蔵野台地や相模原台地が形づくられた（約 10～6 万年前）。

その後、海面が約 100m 以上も低下して東京湾が陸となった（約 2 万年前）が、再び海面が上昇し、入江は関東平野の奥深くにまで進んだ（約 6000 年前）。そして、歴史時代に入ると、土砂の流入によって河口には三角洲が発達し、現在のような関東平野が作られた。

こうした地形変遷過程の一時期、河床の高度が安定したのちに地盤の隆起あるいは海面の低下が起き、その後河川流水による浸食によって河床が大きく低下した結果、河川氾濫原の周囲に形成されるのが河岸（河成）段丘である。

同じような段丘面と段丘崖からなる海岸（海成）段丘は、やはり地盤の隆起あるいは海面の低下に関連して海岸線に沿って形成された階段状の地形である。この場合、段丘面はもとの海底面、段丘崖は海流によって浸食された海蝕崖である。

両者を見分けるには、現河川や海岸周辺といった存在場所だけでするのは適当ではなく、むしろ段丘に近くに存在する微地形や堆積物などを調査して行なう必要がある。

河岸段丘も海岸段丘も日本各地で多く見られる。

かつて地図にあった、泉の地図記号（M23）

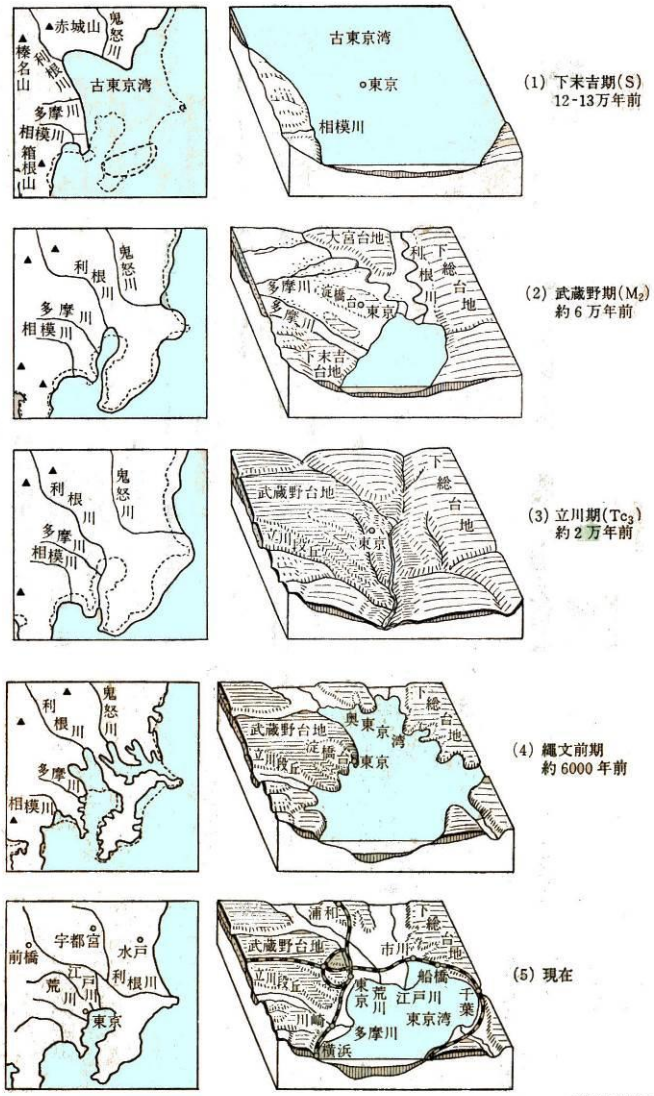


図 VIII-5　関東平野の変遷(貝塚，1961 を改訂)
左列の三角は活動中の火山．右列の断面にみえる黒い層は関東ローム層の上部(立川ロームと武蔵野ローム)，点は河岸段丘砂礫層，縦線は主に海成層(成田層群と沖積層)．

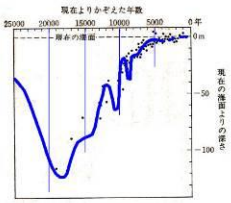


図 VII-1　2万5000年前以後の海面変化．

関東平野の変遷（「東京の自然史」貝塚爽平）

+＊＊＊+　オフィス　地図豆　Yamaoka　mitsuharu　　+＊＊＊+